

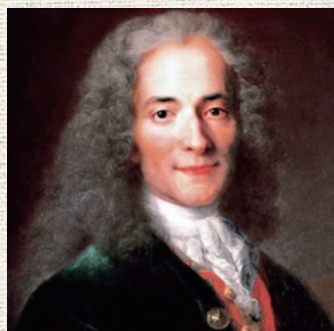


近代市民社会とコーヒー

コーヒーは飲料品として、薬用飲料から機能性飲料への変遷があり、その後さまざまな軌轍の中、嗜好品飲料として世界最大の普及をみせました。コーヒーはいつも、社会とともにありました。公衆とコーヒーという意味では、日用飲料とは離れた世界にあった飲み物を、開かれた形で社会に広めたのはコーヒーハウスです。

歴史上のコーヒーハウスという言葉がとつづくにければ、私はあえて誤解を恐れずにそれを「カフェ」という語で捉えます。寺院や修道院から離れ、嗜好品飲料として、いわゆる「コーヒー」を提供する場所としての「カフェ」は、アラビア半島でおそらくお茶を試されながら、メッカやメデナ、コンスタンチノープルへと広がりを見せました。

現在まで続くヨーロッパの機能的な都市部に「カフェ」が波及したのは、文献学的に遡行すれば1600年代の半ばから、1700年代の初頭の頃。そして1700年代も後半



▲ヴォルテール(哲学者)

に入ると、「カフェ」にひとつの、そしてある決定的な意味が加わります。パリのカフェ・ド・プロコップに、ヴォルテールなどに代表される文化人や知識人が集まりはじめた頃、カフェは近代へと変わりつつある市民社会の中で、特別な意味を持ちはじめていました。都市空間におけるサードプレイスで、階層秩序に対する批評が生まれたのです。民衆蜂起のもつとも有名なものとして、バスチーユ監獄の襲撃がありますが、これはパリのロワイヤル(カフェ)を中心に蠢いた、コーヒーハウスに通う民衆の暴徒化が発端です。フランス革命は、封建的な王政と

旧体制を崩壊させ、近代個人を生み出しましたが、民衆の覚醒が「コーヒーを飲み集まった」事に起因しているのは、驚くべきことではないでしょうか。このように、広がったカフェインの覚醒作用は、世界史と非常に大きな関わりを持ち続けることになるのです。

フランス革命と同時期のアメリカでは、関税自主権を巡り、ボストン港で輸入された積荷の紅茶を海に投げ捨てる事件が起こりました。これがアメリカの独立戦争に、そして英蘭戦争に繋がったのは有名な話ですが、この話には続きがあります。アメリカは政治的理由に起因してお茶が飲めなくなったタイミンゲで、コーヒーを薄めて毎日飲む方法(アメリカン)を自国で編み出したように見えますが、それが現在まで続く大国の成立に繋がったともいえます。新大陸として恐ろしいほどの早



▲バスチーユ襲撃(ウエール)

次号は「ドイツと戦後日本のコーヒー」についてお話しします。



小森 敦也 (こもりあつや)

1982年4月12日生まれ
岐阜県立関高校卒業。東京の大学を経て複数の会社勤務の後、関市のカフェド・ギャラリー アダチに入社。カフェ・パッハのトレセンを経て、CQIのQグレーダー資格を岐阜県で初めて取得。2016年より代表取締役。現在店舗運営に留まらず、海外の農園を視察し、コーヒー豆の収穫や買付に携わる。

カフェ・アダチ

関市小瀬1833 TEL0575-23-0539

さて進歩を遂げ、世界最大の経済大国となったアメリカ。そこには独立戦争後、日用飲料として消費されることになった、大量のコーヒーがありました。さらにドイツの民主化の遅れは、自国の経済を守るためコーヒーを締め出したことが一因としてあり、国家成立後のコーヒーの広がり、その後吹き荒れたファシズムの風は、先の二つの事例と同じ視線を投げかけられているものです。コーヒーはいつも、社会とともにありました。そしてあらゆる形で人々を覚醒し続けて来たのです。